

数えことば

桑原 正紀

ひとりいちわいつとうひとつぶ何遍もわたしを数えなおしてほしい
工藤玲音『水中で口笛』

コスモスの若手の歌友がとてもいい歌集を出した。ともすると若い人の歌集は、ひとりよがりの韜晦や閉塞感が壁となつて、読むのに苦痛さえ伴うことも多いのだが、この歌集の〈玲音ワールド〉には世代を超えて読者を引き込む力がある。もつとこの歌集について語りたいが、本稿の主旨から外れるのでほどほどにする。

掲出した歌は、「わたし」を深く理解してほしい人に、多種多様な角度から「わたし」という存在を見てねと言っているのだが、「ひとり（一人）」はともかく、「いちわ（一羽）」「いつとう（一頭）」「ひとつぶ（一粒）」という数え方が意表をついている。人間ではないものの数え方を出すことによって、「わたし」の自己認識の世界が一気に拡がるのだ。ひよつとしたら人間ではないものかもしれないという感覚には、詩人ならではの飛翔力がある。

ところで、ものを数えるときに付ける「個」や「本」であるが、なんと日本語には五百種ぐらいあるという。こうした助数詞や接尾語と呼ばれるものは日本語とアジアの一部にしかないそうだ。日本語を母語としていても使いこなせる人はかなり限られる。変わり種では、お寺は「宇」、蛸・烏賊は「杯」、鱒子は「腹」、算盤は「挺」、机は「脚」等々数多くあつて、なかなか大変である。短歌を作っていてしばしば悩むのは、蝶や兎等を詠むときに「頭」や「羽」ではどうにも収まりが悪いことだ。こういうときは目をつぶつて「匹」で済ませたり、文脈を変えて「ひとつ」「ふたつ」で通るようにしたりする。細かいことながら、皆さんも結構気を遣っているのではなからうか。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた 安西冬衛
安西も悩んだ末の選択だったろうと想像する。

このように、詩歌できちんと使いこなそうとすると四角四面なものになつておもしろくない。違和感のない範囲で緩やかに考えていだろう。

一方で、ねらいを持って異質な使い方をすると、前掲歌のような味が出る。次の歌も同様である。

やはらかきふるき日本の言葉もて原発かぞふひい、ふ
う、みい、よ 高野公彦『天泣』

やわらかく温かみを帯びた数え言葉が、原発の冷ややかな不気味さをいつそう際立てるのだ。